

# 令和元年度学校評価結果報告書 (年度末評価)

広島県立呉特別支援学校

(本校)

## <目次>

- 様式 4 令和元年度自己評価シート（年度末評価） …… P 1
- 様式 5 令和元年度自己評価シート（年度末評価まとめ） … P 5
- 様式 7 令和元年度学校関係者評価シート（年度末評価） … P 6

令和元年度自己評価シート(年度末評価)

校番	112	学校名	広島県立呉特別支援学校	校長氏名	古谷 晶江	全・定・通	☑分
----	-----	-----	-------------	------	-------	-------	----

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
1 児童生徒の学力の向上【知】							
児童生徒の学力の向上を支える授業づくり	指導略案の「主体的に学習に取り組む態度」に関する目標の「学習評価」に係る評価	44% ※評価Aのみ	60%	89%	A	「主体的に学習に取り組む態度」に関する目標の学習評価の肯定手的評価(A)が89.9%であった。	教育研究部
児童生徒の付けたい力と教科・領域等の目標が分かる個別の指導計画	保護者アンケートによる(満足度)	88%	90%	90%	A	「個別の指導計画を活用し、小学部から高等部まで一貫した教育を行っている。」で肯定的意見が90%であった。	教務部
各教科等を合わせた指導についての年間指導計画の系統性、計画性	教職員アンケートによる(達成度)	90%	90%	81%	B	「各教科等を合わせた指導について、授業及び指導が、年間指導計画の系統性、計画性を踏まえたものになった。」で、達成・やや達成が81%であった。	教務部

【評価結果の分析】

- ・1回目と3回目の自己評価週刊の集計の結果、児童生徒の学習評価について「よくできた」が約5%増加し、「もう少し」が約6%減少した。様々な研修会や授業研究グループでの取組の結果、教員の授業力が向上し、その結果、目標をより達成できる児童生徒が増えたと考えられる。一方で、目標設定や学習評価の客観性や実態把握の妥当性等の課題もある。
- ・児童生徒の付けたい力と教科・領域等の目標がわかる個別の指導計画を作成し、それを活用した取り組みが保護者から理解を得ていると考えられる。
- ・各教科等を合わせた指導について、授業及び指導が年間指導計画の系統性、計画性を踏まえたものになっていたと概ね考えられる。年間指導計画が系統的になっており、それに沿って授業を行っているので、達成できているという回答が複数見られた。その反面、児童生徒の実態差があるために、年間指導計画の内容がすべての児童生徒の実態には合っていないところがあることや、行事や内容、時数の計画の見直しを希望する等の意見が出された。

【今後の改善方策】

- ・児童生徒の実態把握や目標設定に焦点を当てた授業改善の取組を進めていく。
- ・今後も個別の指導計画をもとに保護者と連携を取り、児童生徒への指導が充実するように取り組む。来年度から、個別の教育支援計画、個別の指導計画は校務支援システムを利用することになっている。年度当初に混乱しないよう、教職員への研修を行う。
- ・来年度の年間指導計画作成に向けて、内容や時数を、行事や児童生徒の実態を踏まえて見直し、改善しているところである。また、来年度は、具体的な話し合いができるように、教務部を中心に、研修会を設定していきたい。

2 児童生徒の豊かな心の育成【徳】							
生徒指導上の諸問題対策の推進	生徒指導部研修会の実施回数	3回	3回	3回 1/28 予定	A	サイバー犯罪防止、いじめ防止、人権教育研修会を実施した。いじめ・LGBT・SNS 複合の研修会を予定している。	生徒指導部
児童生徒の能力や可能性を最大限に伸ばす教育活動	コンクール・大会等への応募回数	28口 ※応募総数	9回	10回 (小:2 中:4 高:4)	A	今年度、新たなコンクール等に応募や出展し、9回の目標を達成することができた。	全学部

【評価結果の分析】

・問題行動の未然防止、早期対応に向け、「サイバー犯罪防止研修」と「いじめ防止研修」、「いじめ・LGBT・SNS 複合研修」の3回実施した。また、講師を招聘して「人権教育研修会」も行った。  
 ・小学部は、昭和地区春の文化祭に作品を展示した。また、令和元年度「伝えたい！ことばのかけはし」優秀作品コンクールの作品応募に取り組み、児童が自分で考える力がついてきた。中学部は、例年出品している昭和地区春の文化祭に加え、令和元年度第26回全国特別支援学校文化祭の広島県推薦作品選考に出展した。また、今年度の新たな取組として、令和元年度青少年の健全育成・非行防止の標語、第17回全日本年賀状大賞コンクールに応募した。生徒の中には、受賞することの喜びを味わい、次への意欲を持つ姿が見られた。高等部は、令和元年度第13回広島県障害者陸上競技大会への参加、広島市ピースアートプログラム アート・ルネッサンスへ HPAR2020 への出品、令和元年度大57回呉地区高等学校美術展覧会への出品をした。また、第37回全国都市緑化ひろしまフェア ひろしまはなの環2020へのプランター制作も作業学習で担った。広島県障害者陸上競技大会では、国民体育大会への出場をする記録を残す生徒もおり、他の生徒への影響として次の様々な活動に対して意欲的に取り組んでいくような機運が高まっている。

【今後の改善方策】

・問題行動の未然防止、早期対応に向け、在籍する児童生徒の対応について研修・討議を行うため、来年度は生徒指導部校内研修会を3回と学部学年等でのミニ研修会を1回実施する。研修のテーマ・内容について、児童生徒の実態等を考慮するなど要望を募り、検討する。  
 ・計画的にコンクール等に出展や応募ができるように、締切の時期を踏まえて令和2年度年間指導計画の単元の配列を工夫する。また、出品する展覧会等に合わせ、どの学年が出品していくのかをあらかじめ設定し、それを目指して組織的に取り組んでいけるように年間指導計画の中で設定していく。

3 児童生徒の健康・体力の向上【体】

児童生徒の体力・運動能力を伸ばす教育活動	個々の児童生徒の目標達成率	83.9%	75%	94.8%	A	個々の児童生徒の目標達成率が全体の94.8%であった。	保健安全部
----------------------	---------------	-------	-----	-------	---	-----------------------------	-------

【評価結果の分析】

・個々の児童生徒実態に応じて1年を見通した達成目標を立て、計画的に実施したことにより、中間評価の時点では達成率が40.4%だったが、年度末にはどの学部も達成率が上昇した。3年間継続して取り組んだことにより、児童生徒の運動することの習慣化につながった。

【今後の改善方策】

・3年計画の3年目の取組であり、来年度は新たな目標を設定するが、卒業後の就労を見通して、体力作りは継続的に取り組んでいく。今後は、学校全体での共通した取組を検討する。

4 自立と社会参加を目指し、地域貢献できる力の育成

社会的自立に向けた取組の充実	技能検定（校内検定を含む）上位級取得者の割合	56% ※上位級及び前年度より上位の級	58%	65%	A	特別支援学校技能検定・校内検定「チャレンジ呉！」ともに、目標値を超えることができた。	進路指導部
呉特別支援学校の情報発信	保護者アンケート（満足度）	94%	96%	92%	B	保護者アンケートの満足度が92%だった。	総務部
地域の教育関係者を対象とした研修会の開催	参加者アンケート（研修の満足度） ※数値によるアンケート	—	70%	90%	A	企業・地域校の参観日参加者アンケート全項目の満足度の平均が90%以上であった。	教育相談部

【評価結果の分析】

- ・特別支援学校技能検定の結果 … 上位級取得率 58/83≒69.9% 前年比上位級取得率 17/31≒54.8%
- ・校内検定の結果 ①面接部門 … 上位級取得率 21/36≒58.3% 前年比上位級取得率 12/18≒66.7%
- ②プレゼンテーション部門 … 上位級取得率 3/4=75.0%
- ③パフォーマンス部門 … 上位級取得率 7/10=70.0%

トータル … 118÷182≒64.8%

・特別支援学校技能検定については、のべ受検者数が32人であり、のべ受検種目数は64から83と大幅に増加した。前年に引き続き受検した生徒は、のべ31人であり、こちらも25人から増加した。より多くの種目に挑戦するという姿勢が前年度よりも多く見られた。上位級の取得率はやや増加したが、前年よりも上位の級を取得した割合は若干減少した。限られた練習時間の中、より多くの種目の練習に取り組みながらも上位級を取得したことは、評価に値する。一方で、上位級以外では中位級(4級から6級)が目立った。多くの種目を受検するため、1種目に対する練習が不足したとも考えられる。

・校内検定「チャレンジ呉！」面接部門については、昨年度同様、文字カードを使用するなどの受検への工夫が見られた。また、より生徒の実態に応じた配慮として、質問項目の限定や、同時に複数の質問をしないといった工夫も見られた。継続した練習に加え、これらの工夫・配慮が、昨年度より上位の級の取得率の上昇につながったと言える。

プレゼンテーション部門においては、4組の受検があり、昨年度の6組から減少したが、上位級取得率は16.7%→75%と上昇した。いずれも、自分の興味がある事柄について、よく調べており、発表も練習の成果が表れていた。

パフォーマンス部門では、昨年度12組から10組へと受検者(組)は減少したが、上位級取得率は16.7%→70%と上昇した。今年度の発表内容は、歌や踊り中心で、各組とも、好きな歌や踊りを披露し、生き生きとしていた。

プレゼンテーション部門、パフォーマンス部門とも、3年目を迎え、教員や生徒に定着しつつあり、これまでよりも生徒個々の個性が光る発表が多かった。また、両部門とも、制限時間を超えるグループはなかった。

・情報発信については、保護者アンケートの満足度が昨年度の94%から92%に減少した。A評価(そう思う)が7%増加し、B評価(ほぼそう思う)が9%減少した結果、肯定的な評価が2%減少している。

・ブースプレゼンテーション・カフェサービスの2つの項目については、満足度は100%と評価が高かった。このことから、どちらの参加者も本校で実際に行っている教育活動や支援の実際について興味を持たれていることが考えられる。コーヒーの提供・実物を使ったプレゼンテーション等、具体物を使った体験的な内容であったことも、評価が高い理由の一つとして考えられる。情報交換会・講演会については、どちらも90%以上であった。株式会社マツダ様で実際に働いている卒業生の実演と、雇用する上で、身に付けさせたい力、支援の方法や考え方等について、現場でのお話が聞けたことが評価の高い理由であると考えられる。進路指導・教育実践紹介については、69%と低い評価だった。時間配分ができておらず、教育実践紹介までできなかったことが大きな理由であると考えられる。

【今後の改善方策】

・特別支援学校技能検定については、引き続き、生徒のスキルや課題を把握するとともに、基本の徹底と練習に継続して取り組み、日常の指導の充実や改善に取り組んでいく。校内検定「チャレンジ呉！」面接部門については、生徒の配慮事項に関わって、若干担任と面接官・審査員の打ち合わせ不足の面もみられたので、事前の連携・確認を十分行うようにする。

・特別支援学校技能検定・校内検定「チャレンジ呉！」とともに、生徒たちは、目標に向かって練習に励み、個人差はあるが、達成感や充実感を得ることができた。思うような結果が出ず、悔しい思いをした生徒もいるが、貴重な経験の場となっている。また、受検に向けた指導や練習が、検定の場以外でも活かされ、周りから評価されている例もある。今後も、高等部全生徒が「チャレンジ呉！」3部門のいずれかを受検することで、目標に向かって取り組む姿勢や態度を養い、自己理解を深め、意欲の向上につながるよう指導する。

・モニターでの情報発信が好意的に捉えられていることから更なる充実を図り、引き続きHPや学校だより等による情報発信を積極的に行っていく。

・進路指導・教育実践紹介について、説明の内容の精選や時間配分を再考し、十分な情報提供ができるよう、計画を立て直す。評価の高かったブースプレゼンテーションも同様に全部のブースを回る時間がなかったため、各ブースの時間設定を見直していきたい。

・アンケートの自由記入欄には、「来年も参加したい」という前向きな言葉をいただいた。進路指導部との連携、分掌内での役割分担など、綿密に計画を立てて遂行していきたい。

5 組織的・効率的な業務の遂行

業務改善の取組の「見える化」を図り、具体的な取組を推進	業務改善に係る取組で実行した件数	3件	3件	3件	A 中間期までに、職員室整理棚の設置、学校事務アシスタントへの業務の一部移管(清掃業務、印刷業務)、教頭等の専決事項の見直しの3件を実施した。	管 理 職 ・ 全 職 員
-----------------------------	------------------	----	----	----	--	---------------------

---

【評価結果の分析】

・具体的な取組として、中間期までに目標件数を達成することができた。

【今後の改善方策】

・昨年度から業務改善の取組を行い、いわゆるハード面の整備はできてきているものの、効率的な活用は不十分であることは否めず、国が示した時間外勤務時間45時間のガイドライン以内である教職員が9割である現状ではあるが効力感を感じていないのも事実である。「働き方改革」の意義を教職員全員が認識し、自らが率先して考え行動していけるよう、令和2年度から担当部署を学校衛生委員会とし、教職員の困り感から教職員自らが主体的、組織的に実行していく業務改善を目指す。

## 令和元年度自己評価シート(年度末評価まとめ)

校番	112	学校名	広島県立呉特別支援学校	校長氏名	古谷 晶江	全・定・通	困・分
----	-----	-----	-------------	------	-------	-------	-----

## 1 評価結果の分析

## (1) 成果

## (1) 児童生徒の学力の向上【知】

- ・「児童生徒の学力の向上を支える授業づくり」では、研修会や授業研究グループでの取組の結果、教員の授業力が向上し、目標を達成できた児童生徒が増えたと考えられる。
- ・「児童生徒の付きたい力と教科・領域等の目標が分かる個別の指導計画」では、児童生徒の付きたい力と教科・領域等の目標がわかる個別の指導計画を作成し、それを活用した取組が保護者から理解を得ている。
- ・「各教科等を合わせた指導についての年間指導計画の系統性、計画性」では、各教科等を合わせた指導について、授業及び指導が年間指導計画の系統性、計画性を踏まえたものになっていたと概ね考えられる。

## (2) 児童生徒の豊かな心の育成【徳】

- ・「生徒指導上の諸問題対策の推進」では、予定どおり研修会を実施できた。また、講師を招聘して「人権教育研修会」も行った。
- ・「児童生徒の能力や可能性を最大限に伸ばす教育活動」では、各学部とも積極的にコンクール、競技大会に参加する取組を行った。生徒には、受賞することの喜びや出展への意欲を持つ姿や機運が高まっている。

## (3) 児童生徒の健康・体力の向上【体】

- ・「児童生徒の体力・運動能力を伸ばす教育活動」では、実態に応じて1年を見通した達成目標を立て、計画的に実施したことにより、中間時に比べ年度末にはどの学部も達成率が上昇した。

## (4) 自立と社会参加を目指し、地域貢献できる力の育成

- ・「社会的自立に向けた取組の充実」では、特別支援学校技能検定・校内検定「チャレンジ呉！」とともに、生徒たちは、目標に向かって練習に励み、個人差はあるが、達成感や充実感を得ることができた。
- ・「呉特別支援学校の情報発信」では、昨年度よりも肯定的評価であるA評価の割合は増加している。
- ・「企業・地域校の参観日」では、プレゼン、情報交換会・講演会等の参加者満足度が高く、特別支援教育のセンター的機能を果たすことができた。

## (5) 組織的・効率的な業務の遂行

- ・「業務改善の取組の「見える化」を図り、具体的な取組を推進」では、中間期までに具体的な取組を行い、目標件数を達成することができた。

## (2) 課題

## (1) 児童生徒の学力の向上【知】

- ・「児童生徒の学力の向上を支える授業づくり」では、目標設定や学習評価の客観性や実態把握の妥当性等の課題がある。
- ・「各教科等を合わせた指導についての年間指導計画の系統性、計画性」では、実態差があるために、年間指導計画が全ての児童生徒に網羅できていないことや、行事や内容、時数の見直しを希望する等の意見が出された。

## (2) 児童生徒の豊かな心の育成【徳】

- ・「生徒指導上の諸問題対策の推進」では、計画的な実施ができており、特に問題はない。さらに実効性のある研修会になるよう充実させる。
- ・「児童生徒の能力や可能性を最大限に伸ばす教育活動」では、一定期間に集中的な応募になりがちであったので、計画的に行う必要がある。

## (3) 児童生徒の健康・体力の向上【体】

- ・「児童生徒の体力・運動能力を伸ばす教育活動」では、児童生徒の実態を踏まえ、体力をどのように規定するかを含め、柔軟に目標を設定する必要がある。

## (4) 自立と社会参加を目指し、地域貢献できる力の育成

- ・「社会的自立に向けた取組の充実」では、特別支援学校技能検定は、中位級取得者が目立った。多くの種目を受検するため、1種目に対する練習が不足したと考えられる。
- ・「呉特別支援学校の情報発信」では、A評価の割合は増加しているが、同じく肯定的評価のB評価がA評価の増加分よりも大きく減少したため、全体的な評価として前年度よりも下がった。
- ・「進路指導・教育実践紹介」については参加者満足度が低かった。時間配分ができておらず、予定した内容ができなかった。

## (5) 組織的・効率的な業務の遂行

- ・「業務改善の取組の「見える化」を図り、具体的な取組を推進」では、整備はしているが、活用は不十分であることは否めず、効力感を感じていない。

## 2 今後の改善方策

## (1) 児童生徒の学力の向上【知】

- ・「児童生徒の学力の向上を支える授業づくり」では、児童生徒の実態把握や目標設定に焦点を当てた授業改善の取組を進めていく。
- ・「児童生徒の付きたい力と教科・領域等の目標が分かる個別の指導計画」では、個別の指導計画をもとに保護者と連携を取り、児童生徒への指導が充実するように取り組む。
- ・「各教科等を合わせた指導についての年間指導計画の系統性、計画性」では、来年度の年間指導計画作成に向けて、内容や時数を見直し改善する。来年度は、具体的な話し合いができるように研修会を設定する。

## (2) 児童生徒の豊かな心の育成【徳】

- ・「生徒指導上の諸問題対策の推進」では、児童生徒対応の研修を行うため、研修テーマ・内容について、児童生徒の実態等を考慮して実施する。
- ・「児童生徒の能力や可能性を最大限に伸ばす教育活動」では、計画的にコンクール応募ができるように、締切時期を踏まえて単元の配列を工夫する。出品する学年を予め決め、組織的に取り組んでいく。

## (3) 児童生徒の健康・体力の向上【体】

- ・「児童生徒の体力・運動能力を伸ばす教育活動」では、来年度も児童生徒が運動する習慣化を図っていく。

## (4) 自立と社会参加を目指し、地域貢献できる力の育成

- ・「社会的自立に向けた取組の充実」では、特別支援学校技能検定は、引き続き、基本の徹底と練習に継続して取り組み、日常の指導の充実や改善に取り組む。校内検定「チャレンジ呉！」は、生徒の配慮事項に関わって、担任と面接官・審査員の打ち合わせ不足の面があったので、連携・確認を十分行うようにする。
- ・「呉特別支援学校の情報発信」では、更なる充実を図り、引き続きHPや学校だより等による情報発信を積極的に行っていく。
- ・説明の内容の精選や時間配分を再考し、十分な情報提供ができるよう、計画を立て直す。

## (5) 組織的・効率的な業務の遂行

- ・「業務改善の取組の「見える化」を図り、具体的な取組を推進」では、「働き方改革」の意義を全教職員が認識し行動していくよう、教職員自らが主体的、組織的に実行していく業務改善を目指す。

## 3 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策(学校関係者評価実施後に記入する。)

- ・児童生徒の実態把握に基づいた授業の目標設定、評価の客観性について精度を高めるよう、新たな3か年の研究計画を策定し、引き続き、授業力の向上を図る。
- ・中間時に取組の方向性や妥当性を評価し、改善を図るため、中間時にも評価基準を設定する。
- ・体力の向上の捉えを、単に運動面に限定せず、健康の向上を踏まえ防衛する力にも着目するよう検討する。
- ・コンクール等への応募が児童生徒の励みになるよう、継続して取り組む。
- ・技能検定及び校内検定は、学びの質、指導方法の改善につながる分析を行い、より充実した取組としていく。
- ・実施回数ではなく、質的な変化を評価するよう検討する。

## 令和元年度学校関係者評価シート(年度末評価)

令和2年2月14日

校番	112	学校名	広島県立呉特別支援学校	校長氏名	古谷 晶江	全・定・通	本・分
----	-----	-----	-------------	------	-------	-------	-----

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おおむね適切に行われている。</li> <li>・3か年の最終年度として、設定目標等は適切である。</li> <li>・中間目標や中間達成指標を設定する等、中間評価の在り方を検討する必要がある。</li> <li>・「児童生徒の体力・運動能力を伸ばす教育活動」の中間評価が評価しにくい。</li> <li>・「社会的自立に向けた取組の充実」では、評価指標が高等部の生徒のみが対象となっているので、小学部、中学部の児童生徒も対象にできる評価指標も取り入れるべきである。</li> </ul>
目標の達成状況の評価の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者の満足度が高い評価を得られているのは、素晴らしいことである。</li> <li>・中間の目標設定をする必要がある。</li> <li>・体力の向上、運動、行動する体力の達成率だけでなく「防衛力」に着目してはどうか。小学部低学年は遊びを通して、習慣化しながら身に付けていく。遊びから見える姿を評価設定できるとよい。また、教室の配置を検討するとよい。(中庭に出やすいように1階に配置する。)</li> <li>・研修回数よりは、指導の意識への反映で評価すべきである。</li> </ul>
目標達成に向けた取組の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員全員で取り組んでいることがうかがえる。</li> <li>・大会等への出場、コンクールへの出品等が他の生徒への影響を与えている。作品等を掲示できるスペースを設置するとよい。</li> <li>・体力の増進に関し、運動しやすい環境や運動場、中庭へ出やすい導線を考えてみてはどうか。</li> <li>・評価が低いことを恐れることなく、改善意識の高さの表れと受け取ることもできるのではないか。</li> </ul>
評価結果の分析の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・数値による具体的な分析がされている。</li> <li>・回数ではなく、学びの変化(研修の成果等)を評価するとよい。</li> <li>・技能検定は上位級取得者の割合だけでよいか。学びの質、指導方法の改善につながる分析が必要ではないか。</li> <li>・先生方の「授業力の向上」の一方で、「目標設定や学習評価の客観性や実態把握の妥当性」の課題があるとの記載が気になった。掘り下げて検討すべきである。</li> </ul>
今後の改善方策の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時代の流れ(ICT活用、防火、防衛等)を意識した指導の工夫を期待する。</li> <li>・児童の遊ぶ力をどう育てるか、生徒の振り返りの力をどう育てるか等、授業の中でどう取り組んでいくか考えてみるとよい。</li> <li>・児童生徒作品を展示するとよい。</li> </ul>
総合評価	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康の保持・増進について、地域とのつながりを作り、卒業後の生活へつなげていけるとよい。支援したい人が地域等にうもれているかもしれない。</li> <li>・健康の保持、習慣化していくために地域での医療関係者やスポーツ関係者と連携するとよい。</li> <li>・卒業後の楽しみを見つける授業があるべき。</li> <li>・校訓がすばらしい。児童生徒の明るい表情、元気な挨拶に癒される。今後も校訓どおりの学校をお願いしたい。</li> <li>・小学部から高等部へと学年が上がるごとに子供たちが成長している様子を拝見でき、うれしく思う。これからも子供たち目線での教育をお願いしたい。</li> </ul>